

平成 3 1 年度  
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人金沢芸術創造財団	
施 設 名	金沢 2 1 世紀美術館	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	7,227	(千円)
公 演 事 業	7,227	(千円)
人 材 養 成 事 業	0	(千円)
普 及 啓 発 事 業	0	(千円)







## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。
<p>プログラムの企画にあたっては、金沢 21 世紀美術館の運営方針に基づき、特に以下の 3 点を目標に掲げた。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>①（地域での鑑賞体験）優れた国内外舞台芸術作品を上演する。</li><li>②（アーティストの創作活動推進）作品のクリエイションの場をつくり、創作活動を推進する。</li><li>③（観客の醸成と拡充）従来の観客だけでなく、特に子どもや社会的に舞台芸術に触れる機会の少ないコミュニティへのクリエイティブなアプローチを行う。</li></ol> <p>『消しゴム森』は、岡田利規率いる演劇カンパニー・チェルフィッチュと美術家・金氏徹平という、国内外で活躍する二組のコラボレーションによって、美術館の展示室を舞台に繰り広げる演劇公演である。申請当初は、従来の演劇の鑑賞形態と同様、各回定員 60 名、合計 20 回公演を予定していたが、客席形態を立席（公演時間を限定せず、11 時～17 時に断続的に実施）とし、それに伴いチケット料金及び想定集客数を修正した。創作過程において、従来の演劇の枠を超える本作品のコンセプトに合わせた鑑賞形式を見出したためだが、上記 3 つの目標に照らしても修正は妥当であり、計画以上に質の高い結果が得られた。</p> <p>まず、本作品は、金沢 21 世紀美術館という特殊な場所にあわせて複数の作家が協働で作り上げる新たな作品であり、創作過程での試行錯誤は必須であった。チェルフィッチュは、これまで国内外で多くの公演を行い、美術作家とのコラボレーションも行ってきたが、美術館面積の半分に及ぶ規模で展示／上演を行うのは初めての挑戦であった。当館はその過程に寄り添いながら、公立美術館としてできるかぎりのことを実現すべく、都度柔軟に設計を修正した。これは、作家に新たなチャレンジを行う環境を提供すると同時に、優れた実験的作品を鑑賞する機会を金沢に設けることにつながった（目標①②）。また、鑑賞者が自由に展示室内を回遊し、パフォーマンスに出会うという形式は、当館の劇場（シアター21）で行う通常の演劇公演と比較して、大人数かつ属性としても広範囲の鑑賞者を受け入れる結果となり、量的にも質的にも、観客の醸成と拡充に寄与した（目標③）。</p>
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。
<p>「いま・ここにいる人間のためだけではない演劇は可能か？」というコンセプトは、岡田が東日本大震災後の陸前高田で目の当たりにした光景というローカルな着想源を持ちながらも、近代以降の人間中心主義がもたらした様々な社会問題を抱える現代の世界的なトピックとも繋がっている。このような背景から作られた劇場版『消しゴム山』は、2019 年秋に京都で上演した後、海外でのツアーを予定しており、このコンセプトが世界中の劇場の関心を集めていることがうかがえる。一方、これを劇場という形式の外で行う実験として構想された新作『消しゴム森』は、本来「モノ」のための場所である美術館を舞台とすることでコンセプトを十分に実現するものとなった。さらに、金沢 21 世紀美術館という特殊な場所にあわせた、ここでしか見ることのできない貴重な展示／上演となった。上記のことから、本作品は社会的・文化的に意義深いものであったと考える。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

(1)で記した通り、プログラムの企画あたっては、金沢 21 世紀美術館の運営方針に基づき、①（地域での鑑賞体験）優れた国内外舞台芸術作品を上演する。②（アーティストの創作活動推進）作品のクリエイションの場をつくり、創作活動を推進する。③（観客の醸成と拡充）従来の観客だけでなく、特に子どもや社会的に舞台芸術に触れる機会の少ないコミュニティへのクリエイティブなアプローチを行う。という 3 点を目標に掲げた。

定性的な面では、公演終了後 3 ヶ月に満たない現在、十分評価できる段階にない。ただ、国際的に活躍する二作家が協働制作する新作を、展示／公演という形式から挑戦し、実現したという点において、作家にとっても鑑賞者にとっても新たな体験の機会を提供することにつながり、上記目標にかなっていたと考える。

定量的な面では、従来の演劇の枠を超える本作品のコンセプトに合わせ、席数や時間の制限を設けない形態としたため、当初目標、また、当館の劇場（シアター21）で行う通常の演劇公演と比較して、大人数かつ属性としても広範囲の鑑賞者を受け入れる結果となった。具体的には、9 日間で 4976 人、券種別では、当日券:3,850 人、Peatix（当日・前売）:319 人、招待券:734 人であり、この作品を観るために来場した前売券入場者よりも、観光客を含む当日券入場者がはるかに多かったことが分かる。他方、招待券入場が約 15%を占め、演劇・美術関係者からの注目も高かったことがうかがえる。鑑賞者が自由に展示室内を回遊し、パフォーマンスに出会うという形式は、席を予約し、あらかじめ想定を持って観る従来の演劇作品とは異なる、偶然性に満ちた自由な鑑賞体験をもたらした。

これまで演劇を受容できていなかった新たな観客を掘り起こし、さらに金沢の地において演劇という文化の振興を加速させることに寄与するものになった。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。  
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

本事業は、美術館と、作家、役者、技術スタッフ、制作スタッフの連携のもと準備から公演、撤収までを行った。二作家の協働制作、かつ新作という性質上、作家・役者・各スタッフが現場に集まって制作・調整を行うプロセスに重点を置いたが、限られた滞在期間の中で、それぞれの専門性と知見に基づいて細かく役割分担を行い、効率の良い方法をとった。

入場者数および収益については、創作過程において、従来の演劇の枠を超える本作品のコンセプトに合わせた鑑賞形式を見出した結果、申請時の計画から修正した(詳細は(1)妥当性を参照)。このような修正の結果として、申請時の予想に比べ、大人数かつ属性としても広範囲の鑑賞者を受け入れることが可能となり(目標値 800:実績値 4,976 人)、収入も目標を達成した。

#### (4) 創造性

##### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当館は、有料チケットが必要な展示ゾーン、無料で誰でも出入りできるアートライブラリーやキッズスタジオを含む交流ゾーン、さらに、市民ギャラリーや劇場（シアター21）などがゆるやかに複合した文化施設である。本事業では、当美術館の持つそのような複数の機能を十全に発揮できた。

作品制作段階においては、当館のシアター21 をパフォーマンスの撮影場所として使用した。そこでは、通常演劇や音楽の公演を行うために整備している機材を活用するとともに、常駐の技術スタッフのサポートにより、本作品にとって重要な構成要素である映像をスムーズに制作することができた。さらに、劇場に付随して備えている楽屋などの設備も、長期間にわたって制作を行う役者や作家の身体的負担軽減に役立った。

本番の期間中は、隣のエリアで行なわれている別の展覧会の鑑賞者、さらに、交流ゾーンを訪れる観光客や市民が、ガラス越しにパフォーマンスを垣間見る場面が多くあった。それは、各エリアを閉鎖する壁がなく、別の目的を持つ人々がゆるやかに空気を共有し交流する当館独自の構造によってもたらされた。そのような状況は、本作品だけを目的で訪れる限られた数の観客だけでなく、偶然の出会いを介し幅広い観客を得ることにつながったといえる。



## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

当館は、①世界の「現在（いま）」とともに生きる美術館、②まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館、③地域の伝統を未来につなげ、世界に開く美術館、④子どもたちとともに、成長する美術館の4つのミッションを掲げ、ミュージアムとまちとの共生により、新しい金沢の魅力と活力を創出することを目指して活動してきた。

本作品は、国内外で活躍する演劇カンパニー・チェルフィッチュと、美術家金氏徹平が共同制作する貴重な機会であり、世界的に優れた表現を紹介し、地域の芸術振興につとめてきた当館にとって、これまでの活動の延長上にある。ただし、本作品は、評価が確立した既発表作品ではなく、異なるジャンルの二作家がコンセプトを共有し、ギャラリースペースで新たに作り上げる挑戦に満ちた新作であったため、会期を通して、鑑賞者との関係性を模索しながら実施した。特に、現代的な表現の鑑賞に慣れた人だけではなく、近年急増した観光客を含む幅広い層の観客にとっての作品理解に資するため、いくつかの工夫を行った。まず、館内マップ、作家・役者紹介、作品コンセプトや第三者による論考を掲載したガイドブックを、入口で鑑賞者全員に無料配布した。また、各展示室には、そこでのパフォーマンスや映像で発話される台詞を掲載した回覧用のハンドアウトを設置。全てを日英で作成した。さらに、作品についての感想をシェアしたり、作家を支援できるスマートフォンアプリを導入し、鑑賞者同士が交流できるプラットフォームも積極的に活用した。会期はじめには、ゲストと岡田の対談形式のポスト・パフォーマンス・トークを2回行ったが、両日とも定員を大きく上回る100名以上の観客を集めた。そこでは、演劇・美術の専門家だけではなく、コンセプトに関わる研究者による幅広い議論が行われ、質疑応答でも多くの意見が交わされた。

現代的な表現が世界のあり方やその見方を問う際、美術や演劇といった枠組みは必ずしも重要ではない。今後も、多角的な視野で文化芸術の発展につなげていきたい。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

開館 15 年を迎えた当館は、当初よりシアター21 を主に使用し舞台芸術プログラムを実施してきた。一方、展示ゾーンにおいても、パフォーマンスを含む作品の展示／上演を試みてきた。2009 年に、当館で岡田利規が塩田千春のインスタレーションに応答する形で制作した演劇プログラム《記憶の部屋について》は、その後収蔵作品となった。それから約 10 年を経て、岡田が再度当館で美術作家と協働し制作を行った本作品は、当館と収蔵作家との持続的な関わりの成果にほかならない。

現代美術館として、演劇や美術といったジャンルを横断する試みを継続的に紹介することは、作家にチャレンジングな発表の場を提供し、その表現の発展を支援するだけでなく、当館にとっても、めまぐるしく変化し続ける表現を、いかに受け入れ、鑑賞者に紹介していくかという方法を試行する機会ともなる。本作品における公演／展示の制作、運営、鑑賞者との関わり方の模索は、パフォーマンス作品を含む今後の美術館事業にとって貴重な事例であった。今後も作家との継続的な関わりの中で、発展性のある事業を実施していく。